



森のちやれんがニュース

2022 夏

北海道博物館
HOKKAIDO MUSEUM

Newsletter vol.28



森のちやれんが50周年フォトコンテストを開催しました

2021年、北海道博物館の前身の北海道開拓記念館がオープンして50年となりました。それから北海道博物館として生まれ変わった50年間の「森のちやれんが」（当館の愛称）をおさめた写真を募集するフォトコンテストを開催しました。

2021年11月10日～2022年2月8日の期間に112点の応募をいただきました。その中から、「建物」部門最優秀賞1点、「思い出」部門最優秀賞1点、「建物」部門賞計3点、「思い出」部門賞計3点、ゲスト審査員特別賞計3点を入賞作品に選びました（7ページに掲載）。「建物」部門とは、当館の建物の魅力や面白さ、

かっこよさを伝える部門、「思い出」部門とは、「森のちやれんが」との思い出やストーリーを伝える部門です。

2022年3月26日には授賞式をおこない、11名の受賞者に賞状と記念品を贈呈しました。また同日から5月8日まで館内で開催した受賞作品展では、多くの来館者に作品を見ていただきました。（学芸員 渋谷美月）



CONTENTS

- ② 博物館活動紹介
資料情報の公開を進めています！
- ③ 総合展示紹介 第5テーマ
動物たちの「落とし物」
- ④ 研究活動紹介
自ら学校をつくるー近代日本を生きたアイヌ民族の歩みをたどる
- ⑤ 北海道博物館第8回特別展
「世界の昆虫ー昆虫を通して、生き物の多様性を知るー」
- ⑥ アイヌ民族文化研究センターだより
「見て 聞いて アイヌ文化の世界」
操作方法が変わりました！
- ⑦ 北海道博物館の「建物」の魅力発信
「森のちやれんが50周年」記念事業
- ⑧ 活動ダイアリー
2022年3月～5月の記録

博物館活動紹介

資料情報の公開を進めています！

鈴木 あすみ

研究部博物館研究グループ 学芸員

博物館では、約18万点もの様々な実物資料（モノ）を管理しています。これらの資料に欠かせないのが資料情報です。どんな情報があるかという、何という名前の資料か、収蔵番号は何番か、どこにしまっているのか、といったモノを管理するのに必要な基本情報がまず挙げられます。それから、いつ誰が使っていたものなのか、どうして当館で受け入れることになったのか、どこで集められたものなのか、な

どのモノの価値を高める背景情報も重要な要素です。

当館では、資料情報を専用のデータベースで管理し、約1万点の情報を当館webサイトで公開しています*1。2021年度からは公開件数を増やす取り組みとともに、他機関が運用するデータベースとの連携も積極的に進めています。その1つがサイエンスミュージアムネット*2(S-Net)です。これは、全国の自然史標本のデータをまとめて検索できるwebサイトで、国立科学博物館が運営しています。

S-Netは、標本の調査をしたいときの事前の情報収集はもとより、〇〇という生物は北海道で採集記録があるかな？といった疑問が浮かんだときに、答えを探すための強力なツールとなります。画像こそ掲載されていませんが、標本という実物証拠のあるデータは説得力があります。

また、これらのデータは国際的な自然史ネットワークのGBIF*3のwebサイトにも掲載されるようになっていきます。こちらでは、生物の世界規模の分布図を見ることができます。大陸との共通種が多い北海道の生物について調



図1 当館のデータベース（収蔵資料検索システム）の画面（抜粋）

べると意外な発見があるかもしれません。

今夏、当館が第一弾として提供した無脊椎動物コレクション76点の標本データが公開される予定です。当館で

収集・保管している自然史標本のデータが国内外のデータベースからもご利用いただけるようになります。この機会にぜひ、全国の博物館の集めているデータを覗いてみてください。

北海道博物館収蔵資料検索システム*1

<http://jmapps.ne.jp/hmcollection1/>


サイエンスミュージアムネット*2

<https://science-net.kahaku.go.jp/>
サイエンスミュージアム ネット
Science Museum Net S-Net

GBIF*3

The Global Biodiversity Information
Facility
<https://www.gbif.org/ja/>（日本語）


総合展示紹介・第5テーマ

動物たちの「落とし物」

表 溪 太

研究部自然研究グループ 学芸主査

総合展示室2階の第5テーマ「生き物たちの北海道」に入ると、北海道で見られる動物の剥製がいたるところに展示されています。木の上にも鳥やヘビが隠れていたりするので、あちこち探してみるのも楽しいですが、今回は少し足元に目を向けて、動物の「落とし物」についてご紹介します。

実際に野外で調査をする場合には、目当ての動物を探すのはなかなか大変です。特に夜行性の種が多い哺乳類は、よほど運がよくなないと出会うことができません。そこで大切なヒントになるのが、フィールドサインとも呼ばれる足跡や糞などの痕跡です。足跡からはそれを残した動物の種類や行動がわかりますし、糞からはその動物が何を食べていたのかを調べることもできます。

第5テーマでは、ヒグマ・エゾシカ・ユキウサギ・クマゲラの糞を展示しています。ちなみにこれらはすべて森で拾ってきた実物を展示用に処理したものです。ヒグマの糞は何個も展示してありますが、よく見てみると、クルミやドングリの殻の破片、草の繊維など入っているものが違うのがわかります。また、エゾシカの糞は豆菓子



図1 総合展示第5テーマの動物の糞いろいろ

うにコロコロしているものが多いですが、夏頃には大きめの塊になることもあります。このように、同じ動物の糞でも食べたものや季節によって色や形がだいぶ違うことがあります。

また、タカやフクロウの仲間は餌を丸のみにした後に骨や毛といった消化しづらいものをまとめて吐き出します。これはペリットと呼ばれていて、糞と同じように食べたものを調べることができます。展示しているのはフクロウのペリットで、ネズミの頭骨がいくつも入っているのが見えます。

動物の糞は野外では糞虫などの貴重

な食料となり、菌類に分解され、最終的には植物の養分として循環していくため無駄にはなりません。

もし、山などで動物の「落とし物」をみつけたら、じっくり観察してみると面白い発見があるかもしれません。ただし、寄生虫が入っていることが多いキツネの糞のように病原体を含む可能性がありますので、むやみに触らないよう注意してください。



図2 ネズミの頭骨が入ったフクロウのペリット



図3 エゾシカの糞に集まる昆虫の展示

研究活動紹介

自ら学校をつくる
——近代日本を生きたアイヌ民族の歩みをたどる

小川正人

アイヌ民族文化研究センター長



1963年、京都府生まれ。北海道大学・大学院で教育史を学び、1994年より北海道職員（北海道立アイヌ民族文化研究センター研究職員）。2015年より北海道博物館勤務。

山辺安之助『あいぬ物語』から

サハリン（樺太）のアニワ湾に面した弥満別に生まれた山辺安之助（やまのべ やすのすけ：1867～1923）は、白瀬矗の南極探検（1910～12）に参加したことや、金田一京助が編者となった著書『あいぬ物語』（博文館、1913年）などで、その名を知る方もいらっしゃるのではと思います。

『あいぬ物語』は、山辺が語った自叙伝を金田一がまとめたものです。その後半では、日本統治下となった樺太で、彼自身が特に力を入れて取り組んだこととして、子どもたちのための学校を設けようとした経緯にページが割かれています。

少し長くなりますが、その一部を紹介します。

こういう世になって、今日では、
 樺太も日本の領土になって了った
 から、日本の民政も布かれた。そ
 こで、何とかして、土人達の小供
 たちに読み書きの出来る様にした
 いものだ、学校を建設したいもの
 だと思ったから、役人を見る度に
 私は話をした。

〔中略〕

けれども当時といふものは、役所が初めて建ったばかりであるんだから、日本の小供の学校でさへ、

まだ出来ない位だから、役人たちも、斯ういう。

「当今は、まだ、土人の小供等の
学校を建てゝやりたいのではある
が、民政署の方で今はまだ、そこ
まで手が届かないから、まあ待つ
居れ。」

と云われる。

私の考では、本当に役人衆の云はれるのも其は、尤もだとは思ふものの、教育ばかりは、どうしても早く小供の時に覚える様に、施してやりたい。〔中略〕故に色々様々に苦心をして斯う、考えた。

樺太には、材木は沢山にあるから、材木は若い者等に斫らして、校舎に私達が建てさえすれば学校は出来上る。それから学校で使用する雑費と教員の月給の金位は、魚が沢山居るから網でも土人全部で食料の魚を捕る時分に、一網でも二網でも余分に引けば、学校で使ふ雑費や教員の給料の金位は出来ること易々たるものだろう、と考えたから、何はともあれ、早く学校を設立しようと思った。此事は、他の色々々々敷い^{むつかし}政務を見ている役人の忙しい中を無理にさせようと思ったって、駄目だから、唯教員は、私達一同の、土人輩の中には無いから、教員だけを役人

衆から周旋して貰ひさへすれば結構だと思った。

(『あいぬ物語』より。引用は2021年に青土社から刊行された「新版」によりました。)

こうして山辺は、1906（明治39）年、
先ず私設の学校を開設します。

このとき山辺が目指した「学校」は、アイヌ民族がアイヌ文化のもとに学ぶ学校ではなく、日本の公教育のもとでの学校でした。そしてこの当時、アイヌ民族が自ら学校の設立を求めた取り組みは、樺太だけでなく北海道のいくつかの地域で見られたことなのであり、これらはおしなべて、日本の公教育のもとでの学校を目指すものであったのです。

なぜ、アイヌ民族がこのような学校の設立に取り組んだのか。学校をあえて自分たちで設立することを目指した





写真1
山辺が学校を設けた落帆 (1935年)

背景にはどのような歴史があったのか、そして、学校を設けることで、目指した未来を掴むことはできたのか——こうした背景や経緯を知ることは、明治以後のアイヌ民族が歩まなければならなかった時代のすがたを、より深く知るための大事な手がかりになるのではない。

これが、ここ数年の私の調査のテーマになっています。

「学校をつくる」—その歴史的な位置と意味

樺太での学校の設立に至るまでの山辺の足跡は、この主題を考える上で大事な示唆を与えてくれます。

サハリンは、アイヌやウイльтаなどの諸民族がそれぞれの暮らしを営んできた土地でした。しかし山辺が生まれた19世紀の後半には、南からは日本、北からはロシアという二つの国家が進出し、お互いの権益や領土をあらそう時代になっていました。両国は1855(安政元)年に日露和親条約を締結、この島を両国の雑居地と定めました。山辺の生まれた南部のアニワ湾沿いには日本の商人が漁場経営に乗り出し、アイヌの人々もそこで働かされるようになっていたのです。

日本が明治時代を迎えた1875(明治8)年、日露両国は千島樺太交換条約を締結。この結果、サハリンはロシア領とされることとなりました。そのとき、日本の開拓使は、樺太のアイヌの人々に対し、日本に渡航し日本で暮らすことを強く求め、約二千人のうち841名が北海道の宗谷に移住させられ、

さらにその翌年、石狩の対雁(江別)まで移住させられます。この841名の中に、幼い山辺安之助がおりました。

山辺らは開拓使が治める北海道での暮らしを始めることになったのですが、もともとが本意ではないかたちで故郷を離れてきたことと、移住から数年後にはコレラなどの伝染病で多くの犠牲者が出たことなどがあいまって、人々はやがて続々とサハリンに帰郷します。山辺も、1893(明治26)年に、仲間らとともにサハリンに帰りました。山辺らは、ロシア領となっていたサハリンで暮らすことになります。

さらに1905(明治38)年、日露戦争の結果、サハリン南部は日本領となり樺太庁が統治することとなります。山辺は、こんどは日本の統治下の樺太で生きていくことになりました。

* * * *

山辺は、樺太アイヌの伝統文化が暮らしの中に当たり前にあった時代に生まれつつ、日本やロシアという国家の支配が強まり、それらに自分たちの生活が翻弄される、それも、社会のしくみや社会の主流となる文化そのものがごっそりと変わっていく、そういう時代を生きたことになりました。

このような厳しい時代を生き、過酷な現実の中で暮らしてきたからこそ、山辺は、自分たちの子どもの世代には、これから自分たちが生きて行かねばならない社会の中で必要な教育をこそ、と判断したのだと思います。それは、自分たちにとって愛着のある自分たちの文化を敢えて遠ざけるという、たいへん厳しい判断であり、だからこそ、

切実なものだったと思います。

行政がなかなか動いてくれない、ならば自分たちの手で学校を、という山辺の行動は、そのような切実さの現れだと思うのです。

学校のゆくえを調べ、考えること

アイヌ民族が自ら学校をつくろうとした事例は、この山辺の例のほか、樺太でも、また北海道でも、いくつもの記録を確認することができます。

下の写真は、新冠町の姉去(あねさる)にあった学校の碑です。この地に生まれ自ら牧場を営んだ古川アシンノカル(1857~1925)が、やはりこれからの自分たちの子どもに必要な教育を、ということで設立した私設の学校が出発点でした。



写真2

しかしこの姉去の学校は、のち公立の簡易教育所をへて尋常小学校となったものの、1916(大正5年)、移転することとなります。近くにあった宮内省の新冠御料牧場が拡張され、姉去のアイヌの人々はここから立ち退かねばなくなり、代わりに用意された平取の上貫気別(かみぬきべつ：現在の同町旭)への移住を強いられたので、学校もそれに伴い上貫気別に移転したのです。ここに碑だけが残っている背景には、そのような歴史があるのでした。

人々は、なぜ日本の学校を、日本の教育を求めることになったのか。そうして求めた学校は、教育は、人々が求めたものになったのか——北海道やサハリンの各地の歴史を、一つ一つ、調べていきながら、それぞれの事例に即して、考えていくことが、先ずは大事だと考えています。

北海道博物館第8回特別展

「世界の昆虫 ―昆虫を通して、生き物の多様性を知る―」

令和4(2022)年7月23日(土)～9月25日(日)

この夏、世界中から集められた10万匹を超える昆虫標本が北海道博物館にやってくる！ 見たことがないようなキラキラした昆虫、不思議な形をした昆虫、小さな昆虫からでっかい昆虫ま

で普段見ることのできない昆虫に出会えるチャンス！ 自然界の不思議さや多様性を昆虫標本から感じられます。見どころは、ミヤマクワガタやダイコクコガネなど北海道で見られる昆虫の巨大模型、左右の壁にぎっしりとオサムシが並んだオサムシのトンネル、そして世界中のチョウとガが一面に並ぶチョウとガの壁、その他にも南米のモルフォチョウ、ミイロタテハや奇妙な形のツノゼミ、東南アジアのトリバネ

アゲハ、巨大ナナフシと美しいゴキブリ、アフリカのヘクソドンやコロフォンまで、滅多に見られない珍しい昆虫が大集合。この機会を逃すと、おそらく半世紀は北海道でこれらの昆虫標本を見られなくなると思うので、お見逃しなく。詳しくは北海道博物館HPを見てね♪

(研究部自然研究グループ学芸員
堀 繁久)



展示会ポスター



学芸員イチオシのめんこいゴキブリ

夏休み限定 (7/23～8/21)

生きた昆虫展示

ヘラクレスオオカブトやギラファノコギリクワガタから北海道固有種まで、生きた昆虫を期間限定で特別展示



ヘラクレスオオカブト

アイヌ民族文化研究センターだより

「見て 聞いて アイヌ文化の世界」操作方法が変わりました！

総合展示室では現在、新型コロナウイルス感染症対策を講じた上で運営を行っています。その対策の一つとして、この春、第2テーマ「アイヌ文化の世界」の、視聴覚資料を楽しむコーナー「見て 聞いて アイヌ文化の世界」をさわらずに機械の操作ができるよう改修しました。

たとえば写真のような、センサーの上方で手を動かしてメニューを選択して決定するシステムなども導入。

引き続き、より使いやすく安全な展示をめざしていきますので、ぜひご来館のうえ新しい装置で視聴をお楽しみください！

アイヌ文化研究グループ

(研究主幹 甲地利恵・学芸員 亀丸由紀子・研究職員 吉川佳見)



左上：「見て 聞いて アイヌ文化の世界」のコーナー

左下：新しい装置のひとつ

右下：センサーの上方に手をかざし、さわらずに操作



北海道博物館の「建物」の魅力発信 「森のちゃれんが50周年」記念事業

鈴木明世

総務部企画グループ 研究職員

北海道博物館の建物は、1970年12月に北海道開拓記念館として建設されました。この建物自体が長く残る魅力的なものになるように、当時の北海道知事は、北海道にゆかりのある建築家の佐藤武夫に設計を依頼しました。建築家によってさまざまな想いが込められたこの建物は、50年以上経った現在においても色あせることなく、魅力的な空間を見せてくれます。

そこで、2021年度は「森のちゃれんが50周年」として、来館された皆さまに北海道博物館の展示だけでなく、建物自体も楽しんでもらえるように、さまざまな事業を行いました。

■フォトコンテストの開催

表紙で紹介されているフォトコンテスト（応募総数112点）も、この事業の一環で実施したものです。受賞作品展（2022年3月26日（土）～5月8日（日））では、計11点の素敵な写真を、多くの方々に見ていただくことができました。

■ショートムービーの制作

建物の空間の魅力は、映像でこそ惹き出される部分が多くあります。完成度の高いムービーとなりましたが、後述のイベント以外ではまだ公開していません。公開の際は、当館ウェブサイトや、Twitterなどでお知らせするので、ぜひチェックしてください。

■「たてものみどころガイド」の制作

建物の外観から、細かい装飾に至る工夫をリーフレットにおさめました。博物館のリーフレットとしては珍しく、展示物の紹介はせずに、無料スペースを中心に紹介しています。館内で無料配布していますので、ぜひお手に取って巡り歩いてみてください。（※なくなり次第終了となります）

■森のちゃれんが50周年特別イベント

2022年3月26日（土）に、これらの事業をお披露目するイベントを行いました。当館の建物の魅力を発信する1年間の締めくくりとなる1日でした。イベントの当日には、当館ウェブサイト

上に「建築」ページを新たに公開しました。フォトコンテストの受賞作品や、「たてものみどころガイド」も公開していますので、ぜひQRコードからご覧になってください。

また、当館のTwitterでも建物にまつわるたくさんの情報を発信してきました。ぜひ #森のちゃれんが50周年 で検索してみてください。

ご来館の際には、ぜひ「建物」にも目を向けていただければ幸いです。



当館ウェブサイト
「建築」ページ
<https://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp/about/architecture/>



「たてものみどころガイド」裏面



「建物」部門最優秀賞
「刻まれた歴史」
三好加奈子さん



「思い出」部門最優秀賞
「彩りの会話」
佐竹輝昭さん



「重厚」 大山末光さん



「雪の日のちゃれんが」
小川弘子さん



「映画の舞台」
堂瀬あつ子さん

ゲスト審査員特別賞

◀「建物」部門賞

▼「思い出」部門賞



「お世話になっているお隣の
小母さん、お姉ちゃんと
連れ立って、開拓記念館の
玄関ホールで恐竜をバック
に！！」 青柳正英さん



「花と百年記念塔」
草嶋宏次さん



「それぞれの黒電話」
竹田由香里さん



「冬晴れに佇む」 辻井久幸さん



「北海道百年記念塔「新たな
記憶として」」 千葉暁斗さん



「ちゃれんがに並ぶ鉄線」
村松実理基さん

フォトコンテスト受賞作品一覧
（投稿時のコメントや選評等の詳細は、
上記ウェブページよりご覧ください）

活動ダイアリー

2022年3月～2022年5月の記録

※■は展示活動、■は教育普及活動、■はその他の博物館活動です。

3月2日(水)

■館内定例研究報告会を開催。発表者：水島未記。

3月5日(土)

■はじめての古文書講座⑥を開催。担当：三浦泰之・東俊佑。

3月6日(日)

■子どもワークショップ「小さな野球盤づくり」を開催。担当：舟山直治・尾曲香織。

3月7日(月)

■第10回アイヌ文化巡回展(幕別町百年記念ホール)閉会。

3月12日(土)

■はじめての古文書講座⑦を開催。担当：三浦泰之・東俊佑。

3月13日(日)

■ミュージアムカレッジ「史料に読む北海道と群馬のつながり」を開催。担当：山田伸一。

3月18日(木)

■令和3年度第2回北海道立総合博物館協議会を開催。

3月19日(土)

■はじめての古文書講座⑧を開催。担当：三浦泰之・東俊佑。

3月20日(日)

■アイヌ語講座「文法の基礎④」を開催。担当：遠藤志保・吉川佳見。

3月24日(木)

■森のちゃれんがニュース2022春号(Vol.27)を刊行。

3月26日(土)

■森のちゃれんが50年特別イベント「森のちゃれんが 建物の魅力」を開催。

■北海道博物館研究紀要第7号、北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要第7号を刊行。

3月30日(水)

■館内定例研究報告会を開催。発表者：各研究代表者。

4月9日(土)

■自然観察会「エゾアカガエルのラブコールを聞こう」を開催。担当：水島未記・堀繁久・表深太・自然ふれあい交流館スタッフ。

4月15日(金)

■総合展示室クローズアップ展示①～⑦を展示入替。

①『蝦夷風俗十二ヶ月屏風』を読む(右隻：1～6月)【写真1】

②新選組永倉新八の養父 松前藩医杉村介庵

③田辺尚雄によるアイヌ音楽の調査記録

④【特別展開連】アイヌ口承文芸のなかの虫たち【写真2】



⑤岩手県から北海道へ渡った神楽

⑥【特別展開連】虫と戦い、虫と親しむ【写真3】

⑦【特別展開連】〈歩く宝石〉北海道のオサムシ

4月16日(土)

■ミュージアムカレッジ「学芸員が語る！第19回企画テーマ展の見どころ」を開催。担当：圓谷昂史・久保見幸・北海道化石会会員。【写真4】

4月23日(金)

■屋上スカイビュー特別開放

5月3日(火)～5月5日(木)

■屋上スカイビュー特別開放

5月5日(木)

■特別イベント「石の中からホンモノの化石を掘りだしてみよう！」を開催。担当：圓谷昂史・久保見幸・北海道化石会会員。【写真4】

■北海道化石会への感謝状贈呈

5月7日(土)

■ちゃれんが古文書クラブ①を開催。担当：三浦泰之・東俊佑。

5月13日(金)

■道北巡回展「探してみよう！ 地域のお宝」(名寄市北国博物館) 開会(～6月7日(火))。

5月15日(日)

■ちゃれんがワークショップ「アンモナイト折り紙で学ぶ 生物の「かたち」の不思議」を開催。担当：水島未記・久保見幸。【写真5】

5月18日(水)

■館内定例研究報告会を開催。発表者：各研究代表者。

5月22日(日)

■第19回企画テーマ展・北海道化石会発足50周年記念展「アンモナイトと生きる」閉会。

5月25日(水)

■館内定例研究報告会を開催。発表者：成田敦史・高橋佳久。

5月28日(土)

■ちゃれんが古文書クラブ②を開催。担当：三浦泰之・東俊佑。

5月29日(日)

■ミュージアムカレッジ「じっくり聴こう！アイヌの音楽」を開催。担当：甲地利恵。



人事異動

〈 〉は前職

退職(3月31日付)

〈副館長〉小野寺誠司、〈総務部長兼総括グループ主幹〉川田宣人、〈学芸部長〉堀 繁久、〈総務部総括グループ〉三國正雄、西尾千秋、〈総務部企画グループ兼研究部歴史研究グループ学芸主査〉山田伸一

転出(3月31日付)

新任(4月1日付)

〈総務部総括グループ主幹〉由水正明
学芸部道民サービスグループ兼研究部自然研究グループ学芸員：成田敦史、
学芸部博物館基盤グループ兼研究部博物館研究グループ学芸員：高橋佳久

転入(4月1日付)

内部異動(4月1日付)

副館長：曽根宏之、総務部長兼総括グループ主幹：島村哲也、総務部総括グループ主幹：小野寺努、総務部総括グループ主査：藤田竜太
学芸部長兼研究部生活文化研究グループ主幹：池田貴夫、総務部企画グループ兼アイヌ民族文化研究センター研究主幹：甲地利恵、総務部企画グループ兼研究部生活文化研究グループ主査：山際秀紀、尾曲香織、学芸部道民サービスグループ兼研究部自然研究グループ学芸主査：表 深太
総務部総括グループ：川田宣人、西尾千秋、学芸部博物館基盤グループ兼研究部自然研究グループ学芸員：堀 繁久

再任用(4月1日付)

来館者数

○2022年3月

総合展示室 3,278人 特別展示室 4,204人 はっけん広場 0人

○2021年度合計

総合展示室 36,121人 特別展示室 26,260人 はっけん広場 0人

○2022年4月～5月

総合展示室 10,890人 特別展示室 9,793人 はっけん広場 0人

○累計(2015年4月～2022年5月)

総合展示室 606,508人 特別展示室 441,110人 はっけん広場 120,784人

森のちゃれんがニュース 第28号

発行日：2022年6月28日

編集・発行：北海道博物館

〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2

Tel. (011) 898-0456 Fax. (011) 898-2657

ウェブサイト <https://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp>

©Hokkaido Museum, 2022